



見月伸一さん

三井デザインテックフェロー

松任谷正隆さん

音楽プロデューサー

心地よい暮らしを提供する 「三井デザインテック」の空間表現術

ライフスタイルの多様化はクルマだけでなく、住まいにも変革をもたらしています。そこで、インテリアをデザインするトップ企業のキーマンと、音楽プロデューサー・松任谷正隆さんが、心地よい空間について語り合いました。

撮影：平部政広
ヘアメイク：三輪美子
構成：藤井直樹



Masataka Matsutoya

音楽プロデューサー、アレンジャー、キーボードアーティストとして、妻の松任谷由実を筆頭に、松田聖子、ゆず、いまものがりなど、多くのアーティストの作品に携わる。また、日本自動車ジャーナリスト協会に所属し、TV番組「CAR GRAPHIC TV」ではメインパーソナリティを務めるほか、日本カー・オブ・ザ・イヤー選考委員も務める。

編集部：ヤナセは快適な移動時間を支える暮らしのパートナーとして、様々な輸入車をお客様にご提案しています。暮らしの質の向上を活動理念とする三井デザインテックさんとも、共鳴するものがあるのではないのでしょうか。

見月：はい。弊社はオフィスやホテル、商業施設から個人の住宅にいたるまで、空間の創造を専門に取組んでいます。昨今は社会環境の変化が早く、また激しいうえ、不安定な時代にあります。そうしたなか、私どもは現代的な、心地よい暮らしの実現に向けて、社会や価値感、そしてデザインの流れまで研究を重ねて、ウェルビーイングな空間の創造に力を入れています。



Shinichi Mitsuki

三井デザインテックにおけるデザイン領域のフェロー。現在はホテル、オフィス、住宅など幅広い空間のデザイン提案を監督。2016年よりマレーシア国際家具見本市ヤングデザインコンペティション審査員を務める。2017年の欧州での国際ホテルデザインコンペ[SLEEP]にて、アジア企業として初の審査員特別賞を受賞等の受賞歴を持つ。デザインに関する様々な書籍も執筆している。

松任谷：時代が変われば趣味、好みも変わります。だから僕は、常にベストな空間はないと思っています。ほんのちよつとしたことで、今との接点ももてるような空間が心地いいんじゃないでしょうか。

編集部：「ほんのちよつとしたこと」というのは？

松任谷：これは例えばですが、新幹線などの出展が目立ちますね。クルマと家具のブランドコラボレーションも増えてきていて、ライフスタイル全体でのつながりが強くなってきている気がします。

編集部：クルマの技術が進むなかで、心地よさが重視されています。異業種での交流が活発なのも、そこに理由があるのでしょうか？

見月：そうですね。可能性のひとつとして、自動運転が突き進めば、クルマは移動する箱となり、ガレージに入ったクルマが部屋として機能するかもしれません。

線の先頭車両に乗っている人は「エッジな人たち」。最先端にいるけれど、入れ替わりが激しい。僕は8号車あたりにおいて、そこには最先端から移ってくる人たちが通ったり、最先端にいたことをあきらめた人もいます。僕はそういう雰囲気も心地いいと思っています。自分の住まいもそういう空間です。

国際的なイベントに自動車メーカーも出展



上の写真はすべて、三井デザインテックがインテリアデザインを手がけた事例。■「ザ・プリンス パークタワー東京」のスイートルーム。眺望のよさを開放的な気分で味わえる空間に改装。■同ホテルのSky Bar & Dining Stellar Garden。改装で東京タワービューを堪能し、より景観を楽しむ。■歴史性と機能性を追求したラブリジュアリーな空間のタワーレジデンス。「MJR赤坂グレートタワー」のモデルルーム。■緑に囲まれ、海が見える絶好のロケーションに立つマンションのリノベーション。空間の使い勝手は確保しながらも、思い思いの過ごし方ができる大胆なデザインを取り入れている。

「素材やデザインを上手に使うことで、
『今』との接点ももてる心地よい空間が
できあがるんですね」(松任谷)



Masataka Matsuyota
×
Shinichi Mitsuki

今回の対談は、東京・銀座にある三井デザインテック本社で行われた。ウェルビーイングの向上をめざした未来志向型のオフィスには、研究上の新しいインテリア素材の見本が並ぶデスクションもある。空間創造を担う様々な部門のスタッフが行きかうなか、松任谷さんは見月さんの説明に関心入っていた。

感じるすべての要素のかけ合わせが大切で、それを提案してサポートするのが私たちの仕事なんです。人がいいなと思うのは自分以外の感性を取り入れた時

編集部：三井デザインテックさんの施工例を見ますと、古いものを生かし、新しさも感じられます。見月：今はオフィスやホテル、住宅、カフェ、それぞれが別個なものではなく、そこどころなことをする時代です。オフィスにホテルの要素を合わせたり、古さと新しさをかけ合わせたり……。私たちは、この取り組みを「クロスオーバーデザイン」と呼び、時代の価値感を先取りした新しい空間価値の創造を目指しています。松任谷：場所によって発想を変える原動力なんです。同じ料理でも、食べる場所によって味が変わる。人って知らず知らずのうちに空間に影響されているんです。コロナ禍以降、人々の空間の使い方が変わってきたように思います。そこには積極的に空間から影響されようという気持ちがあるのではないのでしょうか。

編集部：松任谷さんも、空間から受ける影響が仕事の原動力になっているのでしょうか？

松任谷：実は今、両親が住んでい

編集部：すると車内のデザインや素材も住空間寄りになりますね。クルマの内装はリサイクル素材やレザー調素材など、サステナビリティを重視する傾向にあります。見月：環境に配慮することは当然ですが、素材の使い方によっては無機質になることもあります。そこで、インテリアの世界ではノス

た土地に別荘を建てているんです。僕はずっと、新しい空間にはインスパイアされるものがあるに違いないと思っ生きてきました。ホテルではなく、長らくの場所です。インスパイアされたんです。デザインを三井デザインテックさんに相談していますが、僕からあえて細かいイメージは伝えていません。見月：弊社はお客様の想いに対し、最善の解決策を提案するのが仕事ですが、松任谷さんの「インスパイアされた」という発想はとて興味深いんです。空間に他者の感性を入れることでインスパイアされたいという考えは、クリエイティブの側としてハードルが高いだけにやりがいを感じています。松任谷：そもそも僕の音楽の作り方が、ずっとそういうスタイルなんです。コンピュータを使って一人で曲を作ったら、僕の世界しかできません。人が何かに対していいな、って思うのは、自分以外の感性を取り入れた瞬間だと思うんです。「こういう」というのは簡単だけど、自分の感覚の範囲内だと飽きるのも早い。だから僕は、音楽も家も、どこかで想像の範囲を超えてほしい。

見月：松任谷さんの考え方は、私たちの空間づくりでも大きなヒントになりますね。

タルジツクやヴィンテージな要素を入れて、情緒的な雰囲気大切にしたいデザインも出てきています。面白い傾向です。

松任谷：古い話をするけど、昔はクルマのシートで高級素材といえばペロア(※)でした。レザーは丈夫だから運転席用だったんです。編集部：それは知りませんでした。松任谷：今だったらエイジング加工を施したレザーをクルマで使ったら面白いですよ。今の若い世代はあらかじめエイジングされた服を気兼ねなく組み合わせています。新品から使い込んだのとは違うよさがあるんです。新しい古いもの。に心地よさを感じるんですね。

編集部：クルマでもそういうデザインが出てきたらいいですね！

見月：若い世代とはいえ、ヴィンテージな要素だけでなく、洋の東西を超えて組み合わせる人も増えています。和的なものをモダンにかけ合わせたり、時代や文化の垣根を飛び越えて盛り込むようになったのは、とても素敵なことですね。

編集部：でもセンスが問われます。見月：ヴィンテージアイテムを部屋にどんと置けば素敵になるわけではなく、どう組み合わせるかが大事であり、うまくいけばとても心地よい空間になります。空間作りは素材や色、光や音など五感で